

文部科学省における令和 2 年度 EBPM 推進に向けた取組について（報告）

1. 予算関連事業における EBPM の取組

令和 2 年度に文部科学省で作成した予算事業のロジックモデルは 12 事業（うち新規事業 10、継続事業 2）。政府全体の中では平均的な状況である。

<参考>他省庁のロジックモデル作成状況（新規事業／継続事業）

内閣府：12（11／1） 警察庁：9（1／8） 総務省：4（3／0） 法務省：2（1／1）
外務省：3（0／3） 厚生労働省：32（15／17） 農林水産省：39（38／1） 経済産業省：21（21／0） 国土交通省：4（4／0） 環境省：81（26／55） 原子力規制委員会：57（2／55） 防衛省：10（9／1）

（1）実例創出（8 事業）

予算要求過程と連動させ、新規事業から各局 1 事業を選定し、ロジックモデルの作成に取組み、実践事例の増加と知見の蓄積を図った。

（2）行政事業レビューにおける EBPM の活用（4 事業）

行政事業レビューでは新規 10 億円以上の事業についてロジックモデルを作成した。

（3）成果と課題

【成果】

- ① ロジックモデルを作成することにより、施策を巡る現状認識・課題の分析、エビデンスを用いた成果の分析や事業の進捗状況の把握が可能になった。
- ② 事業全体の狙い、アウトカムなどの関係性を体系的に整理することができ、事業内容を対外的に分かりやすく説明することが可能となった。
- ③ ロジックモデルの作成を通じて、事業の進捗状況が把握でき、目的の達成に向けた取組の明確化や適切な目標値の設定を再検討する機会となった。

【課題】

- ① 指標設定の難しさ：事業実施中に感じる手応えや課題をどのような成果指標で把握するか。（事業実施直後に効果が発現しない場合の定量的・定性的なエビデンスの収集）
- ② 省内における EBPM に対する理解の促進（ロジックモデルはあくまでツールであり、ツールを活用するという意識の浸透）
- ③ 負担感の解消と効率的・効果的な取組の必要性

【今後の方向性】

- ・施策の企画立案段階における EBPM 的手法の浸透
- ・測定指標の検討と PDCA サイクルを通じた改善
- ・そのためのツールとしてロジックモデルの活用

※ロジックモデルを活用する趣旨

- ・施策を巡る現状認識及び課題を分析し、極力エビデンスを用いた成果の分析を行うことで PDCA サイクルを回す
- ・事業全体の狙い、アウトカムなどの関係性を体系的に整理し、事業内容を対外的に分かりやすく説明することで、関係者（研究者・自治体・審議会委員）とのコミュニケーションツールとする。（コミュニケーションコストの低減）
- ・事業の進捗状況を把握し、軌道修正・更なる資源投入の可否などの判断を行うための進捗管理ツールとする。

2. 文部科学省における EBPM 研修

文部科学省職員に対して、EBPM を活用するために必要な知見の向上等のため、外部有識者を講師とした EBPM 研修（基礎とロジックモデル作成実践）を2回実施し、のべ約70名が受講した。アンケートにより、受講者の大半が研修に満足したと回答した一方、他の研修との連携や役職別に求められる資質・能力を明確化して階層別の研修を検討してはどうかといった声も寄せられており、職員のニーズに合った幅広い研修の実施が必要である。

（参考：令和2年度開催実績）

- ・EBPM 研修の基礎と実践
- ・科学技術イノベーション政策研修

3. 令和3年度の取組方針策定について

今年度の取組結果を踏まえ次年度の基本的かつ具体的な取組方針について速やかに策定することとしている。